



TV Animation Series

Engage Kiss

V O L U M E T H R E E

©BCE / Project Engage



TV Animation Series Engage Kiss 3

「久しぶりね、シュウ」

「え……」

「三年前……あなたにイカされて、以来かしら？」

「お、お顔はっ！」

「……なんて会話が繰り広げられる。まさにその三年……いや正確には二年と七か月前。二年前とも三年前とも表現できる、どっちつかずの過去。」

欧州某国、某所。

街外れの露台にそびえ立つ、その巨大な塔を持つ建物には、曜日にも季節にも関係なく、日々多くの人が訪れる。

そこは星天教会総本部。

世界中に多くの支持者を持ち、けれど世界中で誰もが知っている訳でもなく、大手とも零細とも言えず、新興とも伝統ともいえる中途半端な立ち位置を、自ら作り出している。宗教団体の総本山だ。

「お久しぶりねえ純潔のシャロン」

「マルレーネ、今日はお前か……」

その大教会の礼拝堂……から数十メートルも地下に潜ったところにある、日も差さない石壁に囲まれ窓もない小さな部屋に、一人の修道服姿の女性が足を踏み入れる。

室内には家具も、電灯以外の電気機器もなく、ただがらんとした部屋の真ん中に一脚の木製の椅子。

「長きにわたる。修行の旅。お疲れ様でした……大司教様も貴女の帰還を大層お喜びになられておりましたよ。」

「ならばこの縄を解いてくれ。そんな敬虔な信徒に対して随分な扱いじゃないか」

……と、その椅子の背に両手を後ろ手に、椅子の脚に両脚を縛られた、こちらも修道服姿の女性が、置かれている。だけだった。

「そうはいきませんわ。貴女が今回の旅を経てなお、いまだ敬虔な信徒であるか否かは、まだ確定した訳ではないのですから……」

ついでに言えば、たった今部屋……いや、ぶっちゃけて言えば地下牢に入ってきた方の、褐色の肌の女性は、手に鞭を持ち、舌なめずりをしながら縛られた女性を睨みつけている。



2.5 years ago

Engage Kiss (Volume Three)
Special novel by Fumihiko Makoto

丸戸史明

「ねえ？ 日本での悪魔退治の任務で無様な醜態を晒した、シャロン・ホーリーグレイルさん？」

——シャロン・ホーリーグレイル。

今この場所、椅子に縛られ身動きの取れない女性は、そんな名を持っていた。

……ついでに言えば、星天教会のトップエージェントたる悪魔使いにして、教会内に十二人しかいない、拘魔聖圧者の第七位、純潔のシャロン。という、口に出すだけで半笑い……いや、血湧き肉躍る二つ名をも備えていたりした。

一年ほど前から、彼女は、ある任務に従事していた。

それは、星天教会の日本支部から気になる情報が流れてきたことが発端だった。

曰く、日本のN県に、数百年も昔に封じられた悪魔……現地風に言えば妖がいたという伝承を頼りに、一人の人間がその場所を特定した上、その悪魔を解き放とうとしている……という、悪魔全て滅ぶべし。を異教義として掲げる星天教会にとっては看過できないものだった。

彼女は教会の指示により日本へと渡航、N県に渡り地道に調査を続け、ついに墮落者たる緒方シユウという人間と、彼が辿り着いた悪魔へと辿り着いた。

そうなれば後は簡単。彼女は教義通り悪魔を滅し、ついでに悪魔憑きとなった緒方シユウを、浄化。するだけ……それはずだったのだが。

「まさか、どこの誰とも知れない男に悪魔を連れ去られるなんて……さすがにこれは、全ての命に愛を注ぐわたしにすら難題しきれない失態と言えますわ」

そう、シャロンは、簡単だったはずの事後処理に失敗した。

封印を解いた悪魔は緒方シユウに持ち去られ、一体の悪魔と一人の悪魔憑きを世に放つという散々な成果とともに帰還し、その結果、こうして地下車へ収監され、さらに毎日のように仲間からの尋問を受けているというのが今の状況だった。

「任務に失敗したのは認める。その責を負うのもやぶさかではない」

だからシャロンは、体を縛りつけられたままでも抵抗するそぶりもなく、嬉き気味に殊勝な言葉を紡ぎ出し

「だが、私を追及するのが、あろうことかお前だということの状況には納得していない。何様のつもりだマルレーネ」

「な……」

……たように思えたがそうではなかった。

「聞いたぞマルレーネ。お前、一代前の、博愛。が、地方の司祭と不倫していた事実を密告して追放し、その後者に収まったそうだな？ 仲間を売って点数稼ぎとはいかにもお前らしい。何が、博愛のマルレーネ。だ、この粘着女め」

「う、う、う……うるさいっ！ 答人が気安く口を開くなあああ！」

——マルレーネ・ヒルデガート。

今この場所、椅子に縛られたシャロンを見下ろす女性は、そんな名を持っていた。

……ついでに言えば、星天教会のトップエージェントたる悪魔使いにして、教会内に十二人しかいない、拘魔聖圧者の第十一位、博愛のマルレーネ。という以下略。

シャロンとマルレーネは、同じ時期に同じ支部に配属された同期入信者だった。

しかしその後の実績やその他諸々の事情が重なり、シャロンは二年前に早々と拘魔聖圧者へと昇格した。

その後は本部で華々しく悪魔狩りの実績を積み上げ、修行と称した使い走り奔走するマルレーネとは大きな差が開いていた。

……そう、今回の事件が起こるまでは。

「そ、そうやって相手を口汚く罵ることで自らの罪を誤魔化そうとしても、我々が神は見逃しませんわよ？ 何故ならそれは詭弁の特徴のガイドラインの一つ『自分の見解を述べずに人格批判をする』に該当するからです！」

「いや我々が神がそんなアレなガイドライン参照していると思ってる時点でとてつもない冒涇だと思っただが……」

「と、とにかく貴女には、今から詭弁を使うことなく説明していただきます……拘魔聖正者ともある者が、たかが民間人の男に騙され、悪魔を殺すことも、その死骸を持ち帰ることもなく手ぶらで帰還したその事情をね？」

「どうせ私が語らずとも既に調べはついているんだろう？二度手間はやめなにか？」

「……どうしても話したくないと言うのなら、口が滑らかになるおまじないを掛けてあげてもいいのですよ？」

と、マルレーネは、重んだ笑みとともに右手に持った鞭を振るい、左の掌の上で乾いた音を立てた。

「いいのか私の肌に傷をつけて？ エクソシストとしての商品価値が落ちるぞ？」

「くっ……」

しかしシャロンの方も心得たもので、巧妙に自分の立ち位置を利用してマルレーネの攻撃衝動を封じ込める。ちなみに、何故肌を傷つけることが商品価値の棄損になるのかについてはここでは詳しく説明しない（ヒント……純潔）。

「仕方ありませんね。では紳士的……いえ淑女的に進めましょう」

結局、ここでは自らの嗜虐性よりも任務を優先し、マルレーネはつとめて冷静に、ふたたび語り出す。

「今からこちらが把握している状況を話して聞かせますわ。貴女は異議がある時のみ発言しなさい。発言なき場合は全て肯定したとして記録しますので」

「勝手にしろ」

「では始めますね……今日何うのは、悪魔を捕獲したその後のことです……」

さすがにもう挑発で時を稼ぐのに限界を感じたのか、シャロンの方も、ふてくされた態度のままではあった

が、追及を受ける覚悟を決めたようだった。

「悪魔を捕獲したその夜、貴女はある男とベッドを共にした……間違いないですわね？」

無言……つまり肯定のための数秒が、静かに流れる。

「男の名は緒方シュウ……自称、フリーの悪魔狩り……つまり、我らの。相容れぬ同業。です」
またしても無言。

「特徴としては、緑のコートを着用。髪はボサボサ。目が死んでいて……」

とことん無言。

「年齢は、貴女よりも若く……」

「いや同い年。ほぼ同い年だ。本人から聞いたから間違いない」

そしてどういふ感情で言ったのかはともかく、突然の食い気味での否定。

ちなみに読者諸兄も驚いたかもしれないが、確かに設定上はそうなっている。

「それって彼が、未成年であることを誤魔化すための嘘だったのではないですか？そして、貴女も実は気づいていてそれを受け入れ……」

「そこに聞いただけは絶対に嘘は言わない神に誓う。私はそんなチャライ年下男に体よく軽がされるような都合のいい年上女などではない」

「そ、そう、ですの……？」

シャロンの、口調はともかく、今までとは比べ物にならないほどスピード感のある反応に、マルレーネは少しの間、呆気にとられた様子で彼女を眺めていた。

それでも、ようやくシャロンの供述が取れ始めたことに満足した様子で、やがて素直に資料に目を戻し、先を続けた。

「貴女は彼を挑発するように、まるで蜘蛛のごとく彼の目の前で一枚一枚脱いでみせた」

そしてシャロンはまた、落ち着きを取り戻した様子で無言に戻る。

「まずは修道服。続けてキャミソール、ガーティストッキング、さらに下着……そしてとうとう最後の着であ

るヴェールまでも……っ！」

相変わらず無言。

……下着ではなくヴェールが最後の砦というのが微妙に要な違和感を醸し出していたが、それでもシャロンは、そこは当然のように受け止めている様子だった。

「ベッドに最初に横たわったのは貴女の方……両手を広げ、まるで聖母のように男を迎え入れ抱きしめた……けれどその奥底は聖母とは程遠く、マクマのように煮えたぎり男を受け入れるべく準備は整っていた！」

その「奥底」というのが物理的なものなのか心情的なものなのかは微妙にはかすという、官能小説風の朗読術を駆使しつつ、マルレーネはシャロンを挑発する。

しかしそれでもやはりシャロンは反応せず、ただ蔑むような視線でマルレーネを見つめていた。

「……何故そのような迂遠な手段を取ったのです？ シャロン」

突然の問いかけにも、まだシャロンは答えない。

「ベッドで肌を重ねるまでして油断を誘うなど、ハニートラブとしても下の下の策。思わせぶりの態度は取りつつも、コトに及ぶ前に決着をつけるのが正しいハニートラブのあり方でしょう！」

「正しいハニートラブってなんだ……」

「……つもりだったがそこはツッコまずにはいられなかった。」

「ベッドに誘う前にさっさと殺してしまえば良かったのでは？」

「それは無理だ。あの男に隙はなかった」

「……本当に、それだけですの？」

「……どういう意味だ？」

シャロンの表情が、蔑みのそれから、嫌悪のそれに変貌していく。

それはマルレーネにとっては、相手に余裕がなくなってきたという吉兆に見えたようで……

「実は惚れたのではないのですか？」

怪みかけるマルレーネを、シャロンはさらに激しい視線で睨みつける。

「三秒以内に反論しないと肯定と受け止めますわよ。三……」

「馬鹿馬鹿しくて否定する気も起きなかっただけだ」

「あ、ムキになった、やっぱり惚れたのですね」

「惚れてないなんの興味もない馬鹿なことを言うな」

「別に惚れてなくてもいいではありませんか。何しろ貴女は、純潔という二つ名があるにもかかわらず、実際にはそれとかけ離れた……」

「まさに博愛とはかけ離れた粘着質っぷりだなマルレーネ！」

「ええい正直に白状しなさい好きだったんでしょシャロン！」

「好きな訳ないだらちいちゃ嘘撒き散らすなバーカバーカ！」

そして高度な情報戦は、突然小学生レベルの揚げ足の取り合いへと変貌を遂げた……

「だからさっきからずっと言っているだろう！ 奴と寝たのは油断させて悪魔を奪うためだったと！」

「ただ油断させるためだけに自分の身体を自由にさせるといのはあまりにサービスが過ぎるのではないかしら純潔とか言ってるくせに！」

「お前はそういう方面には疎いだろうから教えてやろう。男が一番油断する瞬間とは何だと思う？ それは女の肌に埋もれている時だ！」

「ちなみに女が一番油断する瞬間は何だと思えます？ それは男の腕に抱かれている時ですよねそうですね経歴者さん！」

「はっ……！ わ、私ほどの者ならば、たとえちよつと危険な香りをして、そこそこ私と渡り合えるほどに腕が立つて、しかも結構かわいげのある男に抱かれていたとしても油断などするはずがない！」

「なんかだいたい女性経験者ってまずけど本当に油断してなかったんですのそれ？」

さらに小学生レベルの揚げ足の取り合いが、中学生レベルの下ネタバトルへと移行する頃には、外はすでにとつぷりと日が暮れていたのだが、地下牢に籠もる彼女たちにはそれを知る術はない。

「……ま、まあいいです。あなたがそこまで自分の油断を否定するとすると、教会としては、もう一つの可能性を考慮しなければなりませんわ」

「もう一つの可能性……だと？」

「ええ、今のあなたのその悔しそうな態度が、全て芝居だという可能性です」

「意味がわからんな。何が言いたいのだマルレーネ？」

「では具体的に言ってみよう……シャロン、貴女、その緒方シユウという男と、繋がっているのでは？」

「い、いや、本当に繋がったかどうかは……結構絶妙なタイミングで毒が回ったからその辺りの感覚が……」

「いやそういうことじゃなくてですね！ つまり今でも、その男と秘密裏に連絡を取り、ほとぼりが冷めた頃に合流して手に手を取って教会から足抜けするつもりなのではないでしょうか？ と聞いているのです！」

「……………はあああつ？」

そしてその時シャロンは、今まで生きてきた中でもっともヤンキー的な視線で相手を睨み返した。

「作戦に問題なし、油断なし、自らの能力にも問題ないならば結論は一つ。意図通りに彼に悪魔を引き渡したということに……」

「ちょっと待てあの男と手を繋ぐだと？ そんな肌を重ねるよりもあり得ない行為に私が及ぶとも思っているのかこの勘違い女！」

「だからさっきから否定の方向性がずれてるのよ貴女！」

「今さらシユウと組むなどと、方に一つもあり得ない！」

「でもそうとでも考えないと、前にあなたが言った『男に渡された解毒薬で九死に一生を得た』という証言も矛盾だらけなのですわ！」

「くっ……」

そう、確かに神経毒を盛られたシャロンは、本来ならばあの豪雪のロッジで誰にも発見されることなく、体も命も凍りつくはずだった。

それでもシユウは、自分が逃げる間際、シャロンに口移しで解毒薬を流し込み、「ごめんなシャロン……」

と耳元で囁いて姿を消したのだった。

「普通、自分を殺そうとした女を助けるとは思います？ しかも悪魔を持ち去るほどの危険思想の持ち主が？」

「……………」

そしてシャロンは、また黙り込む。

けれどそれは、今までのような肯定の裏付けではなく、ただ自分の中で考えを巡らせ、なんとか言葉を紡ぎ出そうとしているようで……

「だ、だが、だが……それでも私が、あの男と再び組むことはあり得ない」

「貴女の性癖と真ん中で、しかも相手も憎からず思っている様子なのに？」

「どうしても私は……っ、あの男に対する憎しみを消すことはできない！」

「貴女がそこまで強い憎しみに囚われてしまったのは、何故なのですか？」

そのシャロンの態度の変化を察したマルレーネが、今こそ決定的な言質を取るチャンスとばかりに、猫なで声で優しく促すように囁きかける。

「それは……」

「いいのよシャロン……全てを吐き出してしまいなさい？」

「だ、だって、だってあの男……私を抱きあう前に何て言ったと思う？」

「何と……言ったのですか？」

「『故郷に恋人がいるので君を愛することはできない』って……っ！」

「……………あー」

しかしその千載一遇のチャンスをモノにしたはずのマルレーネは……
すぐに「聞かなきゃよかった……」という言葉を呑み込んだような後悔の表情を見せた。

「それ別に言う必要なくないか？ そもそもこっちだってそういうつもりじゃない訳だ。お互い割り切って思ってた訳だからな？」

「……ええと、そもそも騙し討ちのためって言っていましたよね？」

「だが、好きでもなんでもなかったとしても、そうハッキリ言われるとこっぴどく思ってしまうところがある訳だ。博愛たるお前になら分かるだろうマルレーネ？」

「あり、私、博愛の二つ名はただ前任から引き継いだだけなので」

「しかも更に聞いてみたところ、その恋人というのは子供の頃から一緒にいる幼なじみの年上女だそうだ。年上だ、年上だぞ？ 気に喰わんとは思わないか？」

「なんでそんな年上女に愛な思入れがあるのよ……」

「……うるさい、全て吐き出せと言ったのはお前の方だ。私はただ思うところを全て口にただけだ……」

「はあ……」

「呆れるな」

「呆れもするわ。あの、同期一の戦闘狂だったシャロン・ホーリーグレイルが、こんな……」

「こんな、なんだ？」

「こんなに女……いいえ、今だと、人間と言った方がいいのかしらね」

「マルレーネ……？」

シャロンの、思いもよらぬ激情の奔流に、マルレーネは大いに引きつつ、それでも、今までのものとは少し別の感情が芽生えつつあった。

「今日の尋問はこれまでにしましょう……拘束を解くのはもう少しかかるかもしれないけれど、貴女なら耐えられるわよね？」

彼女に対しての積年の敵意や嫉妬、そしてその元となる羨望だけでなく、憐憫や同情、そしてそこから派生する友情へと。

「では、私は行くけれど……最後に何か言っておきたいことはあるかしら？」

「……そうだな、実は、一つだけ」

「なあに？」

と、シャロンは、ここで言葉の音を消した。

「（お前にだけ、伝えたいことがある）」

「……シャロン？」

「（教会の耳には、できれば入れたくないことだ）」

「……」

シャロンの口が、微かではあったが、紛れもなくそう動くのをマルレーネは視認した。

それは、この取り調べが録画されていることを知っているシャロンの、多分、真の供述。

信じたものにだけ話せる、重要な情報のはずで……

「（こちらに耳を……）」

「（わかりました……）」

その取引に応じ、マルレーネも口を動かすだけのサイレント会話へと移行し、シャロンの口元に耳を寄せる。

「（実はな、マルレーネ）」

「（ええ……）」

そして次の瞬間……

「入信した時からずっと、お前のことが大嫌いだっただけ……」

「っ？」

至近距離から、耳をつんざく叫びとともに、ごんっという激しい衝撃が、マルレーネの後頭部を襲った。

その時、ようやくマルレーネは気づいた。

シャロンに誘い込まれるまま、彼女の攻撃範囲に入り込んでしまったことに。

「なあーにが女だー なあーにが人間だー さっきの供述など全て嘘っぱちに決まっているだろがあああ」

「……」

マルレーネを頭で床に叩き伏せると、シャロンは椅子ごと倒れ、彼女に全体重（椅子込み）でのしかかる。

「ちょ、ちょっ！ 痛い痛い！ 苦しい！」

「私が男に騙されただとか？ 憎からず思っていただとか？ そんなことが欠片でもあると思っているのかある訳ないだろがああああ！」

「離して！ どいて！ うぎゃあああああああー！」

それから、僅てた他の信徒が飛び込んでくるまでの数秒間、シャロンの追撃は続き……

・博愛のマルレーネは、肋骨と頭蓋骨を折る重傷を負い、全治半年の診断を受け……

併せて、純潔のシャロン。の拘留期間は、同じく半年延長された。

終 幕

それから●年後……

「見つけたわよ純潔のシャロン……いいえ、裏切り者シャロン！」

「……マルレーネ、またお前か」

彼女たちの関係値は、さほど変わっていない。

Engage
エンゲージ
Kiss

2.5 years ago

丸戸史明

発行：2022年11月30日

発売元：株式会社アニプレックス
〒102-8353 東京都千代田区六番町 4-5

編集協力：萩原 猛（オルクス）

装丁者：BALCOLONY.

印刷・製本：株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製、複写することはできません。

※NOT FOR SALE

©BCE / Project Engage
ANZX/ZB 15645
Printed in Japan